

# 経 営 部 門

沖縄県石垣市

多宇 司・多宇 明子 (肉用牛繁殖経営)

暖地型牧草を活用した輪換放牧と  
採草利用による肉用牛繁殖経営

— 60 歳定年、後継者へバトンタッチ —

平成 20 年度 (第 47 回) 農林水産祭天皇杯  
第 12 回全国草地畜産コンクール農林水産大臣賞



多宇さんご夫妻

つかさ牧場は、沖縄県の最西南端に位置する八重山諸島の中心石垣島の北部に立地している。亜熱帯海洋性気候により温暖湿潤 (平均気温 24 度) で、黒潮の影響によって年間の気温変化は小さい。

経営主の多宇司氏は昭和 56 年に鯉渕学園を卒業後、実家に戻り就農した。実家は当時さとうきび 10ha、肉用牛 30 頭の耕畜複合経営であったが、その後、石垣第二地区畜産基地建設事業により施設と放牧地を造成し、畜産主体の経営に移行した。昭和 62 年に父親から経営移譲されてからは、肉用繁殖牛の専業経営へと転換した。平成元年に明子夫人と結婚し、平成 11 年には家族全員 (夫婦、両親、子供 3 人) で家族協定を締結している。経営は夫婦のみで実質的に担われており、経営主は繁殖牛の飼育管理、草地管理、配偶者は子牛の哺育・育成、経理関係と役割分担を明確化している。

平成 12 年に繁殖牛を 100 頭規模にまで拡大し、同時に 18ha の放牧地をそれまでの 4～5 牧区区画から 16 牧区に細分し、集約的周年輪換放牧に転換した。平成 18 年には哺育ロボットを導入して子牛管理の省力化を図る一方、早期離乳による繁殖成績の向上に取り組んでいる。

経営の特徴と評価点をあげると、①総面積 28.2ha で土壌分析とそれに基づく適切な肥培管理による高い収量、集約的周年放牧により飼料自給率 69.6% (粗飼料自給率 92.9%) と高い飼料自給率を達成している、②分娩は放牧地で自

然分娩を行っているが、初妊牛は畜舎での分娩を行う場合もある。また産後 1 週間程度で親子とも舎飼いに移行、生後 10 日程度で早期親子分離を行い、子牛は哺乳ロボットでの管理、親牛は牛舎近くの牧区での放牧ならび舎飼いによる繁殖管理を行うなど、省力的かつ緻密な飼養技術による高い繁殖成績をあげている、③家族労働力による多頭飼養と高い技術成績によって、生産原価 212 千円と、高価格・低コストによる高い収益性を実現し、家族労働力 1 人当たり年間所得額は 12,902 千円 (所得率 49.4%) に達している、④周年放牧や哺乳ロボットの導入などにより繁殖牛 1 頭当たり投下労働時間 26.5 時間、労働力 1 人 1 日当たり投下労働時間 5.4 時間と高い労働生産性を達成し、省力化によるゆとりある経営を行っている、⑤長男は就農の意向を持っており、将来は繁殖牛の頭数規模拡大とともに、現在も一部取り入れている繁殖・肥育一貫化や、加工・販売など川下への進出も検討している、⑥自らの繁殖子牛の交配情報を含む販売成績を開示し、「石垣牛」ブランドの推進や肉用牛の改良・振興等に努めている。

厳しい経済環境下に置かれている離島において、その立地条件と地域の資源を活用し、高収量な牧草生産に基づいた集約的な周年放牧と哺乳ロボットやパソコンなどを活用して、省力的でありながら緻密な飼養管理という、高い物的生産性と労働生産性を共に実現している事例である。



▲つかさ牧場の看板  
八重山地域の温暖な気候を生かした経営とともに  
石垣牛のブランド化を推進する



▲大浦地区の放牧地と採草地  
放牧地は4ha（8牧区）と採草地6.2ha



▲早期離乳による繁殖成績の向上  
哺乳ロボットを導入し省力化を図った



▲舎飼いによる繁殖管理（50～60日間）  
成雌牛の平均産次数は8産  
自家育成牛を主体に更新に取り組む



▲集約的周年輪換放牧  
18haの放牧地を16牧区に細分



▲周年放牧によるゆとりある経営  
後継者（長男）も就農の意向をもっている